

保育実習における学びを高めるためには —保育実習ⅠA・Ⅱにおいて学びの成果が高かった実習生の語りから

Enhancing Learning in Early Childhood Education Practicums: Insights from High-Achieving Students in Practicum ⅠA and Ⅱ

林 幹 士

Masashi Hayashi

(要 約)

本研究では、保育実習ⅠAと保育実習Ⅱにおいて、学びの成果が高かった実習生の語りから、保育実習における学び内容と学び方を明らかにすることを目的とし、対象学生である保育実習生にインタビューを実施した。インタビューデータを分析して、10の学び内容と8の学び方を明らかにし、これらの結果から保育実習における学びを高めるためのポイントとして、(1)保育士の動き・援助方法・子どもとのかかわりの意図まで考えてよく見る(2)保育士の話をしっかりと聴き意識的に吸収する(3)実習中に気付いたことはメモをとる(4)保育実習ⅠAと保育実習Ⅱの学びの連続性を意識する(5)その日のうちにエピソードを書く(6)うまくいかないことは、保育士に積極的に相談する、の6点を示した。

(キーワード)

保育実習・学習成果・学習内容・学習方法・実習生の語り

1. はじめに

保育実習指導で実習の振り返り面談をするなかで、保育実習における学びの成果が高い学生とそうでない学生がいることを痛感する。それは、なぜだろうか。保育実習における学生の学び内容や学び方、授業への取り組み方、保育者養成校の教員による授業内容や訪問指導のあり方、実習園の保育者による実習生への指導方法、などいくつかの要因がある。

学生は実習でどのような学び内容を獲得しているのだろうか。田村・木村・谷村(2021)は、保育実習によってコミュニケーション力、保育計画力、保育展開力といった具体的な保育実践力が向上することを明らかにした¹⁾。また、三橋(2021)は、幼稚園教育実習における学びは、担当クラスにおいて「保育者のように実践」を通し「自らの成長を見つめる」学びであるとしている²⁾。そして、川原(2016)は、学生が実習を振り返った際に、自分に身についたと実感できる学びとして、「子どもへの言葉かけ」と「子ども同士のトラブルへの対応」であることがわかったとしている³⁾。これらのことから、子どもとかかわることで、保育における実践力を獲得している。

保育実習において、効果的に学びを獲得するための条件を明らかにした研究がある。及川・野田・岩崎(2015)は、保育実習を正統的周辺参加としてとらえた場合、それが効果的な学びの場となるためには、2つの点が重要であるとしている⁴⁾。1つがアクセスの問題であり、実践現場への参加が認められていたとしても、進行中の活動や成員たちへのアクセスが限られてしまうような場合は、そこでの学びは十分なものとはならないとしている。2つ目が実践現場の透明性であり、実習を行う施設・子どもの発

達・保育者の援助や支援・現場で使用される物やその使い方・使用される言葉・保育実技などについてあらかじめ知っておくこと、こうした実践現場の透明性を獲得しておくことで状況へのより深い参加を可能とし、そこでの学びを効果的にすると指摘している。さらに、正統的周辺参加における学習プロセスとは、実践共同体の新参加者が十全的参加を目指す向心的発達である。つまり「保育者になりたい」という気持ちがその前提にない場合、この学びのプロセス自体が成立しない可能性があるとしている。保育実習において、アクセスに制限がなく透明性を獲得した状況のなかで、保育者になりたい強い気持ちで保育実習に参加することが重要である。

保育実習指導の授業について、つぎのような研究がある。前田（2020）は、保育実習Ⅱを終えた保育実習生が実習を自己省察する観点から質問紙調査を行い、以下の2点を明らかにした⁵⁾。第1に、実習先で求められる内容は大きく2つあり、保育演習技術（手遊び・絵本・ピアノ等）と、保育援助技術（子どもとの関わり・設定保育等）であり、それらをバランスよく準備して実習に臨めるような実習指導が求められる。第2に、実習経験をより深めるための指導として、実習生に対し、実習前には子どもとの関わりを意識させること、実習後には自己省察を促すことが有効であるとしている。

実習の事後指導の授業の振り返り方によっても実習の学びは高まる。山田（2011）は、学びを深める保育実習事後指導について、実習自己課題を実習前に設定し、実習後にふりかえるという作業を保育実習Ⅰ、教育実習、保育実習Ⅱと繰り返し行い、それを記録として残し実習個人カルテを作成する取り組みを実施した⁶⁾。実習個人カルテの取り組みは、今まで実習で積み重ねてきた自己課題と達成度を常に可視化し、ふりかえりを土台に次の新たな課題を考えることができ保育を学ぶ視点が絞られていくことがわかったとしている。また、鶴川（2019）は、事後指導において、エピソード記述としてまとめることで実習での学びを確かな知識として認識し、自身の力として定着することや自身の実習での体験をフィードバックすることができ保育士として必要な専門性の向上を期待できると指摘している⁷⁾。森（2016）は、学生が自分自身の実習を振り返り、エピソード記述に描き出すことで、実習をより良い学びに繋げることができるとしている⁸⁾。

訪問指導に関する研究がある。浅井・浅井（2019）は、保育所実習における訪問指導のあり方を検討している⁹⁾。分析の結果、実習生が訪問指導時に意義を感じる指導は、不安の緩和や激励につながる指導や、実習生の代弁や実習施設との調整などであると指摘している。一方、実習日誌や指導案に対する指導や実習に関する事務的な説明は有意な影響を及ぼしていなかったことを明らかにしている。

保育者の実習中の指導方法についての研究がある。小林（2020）は、学生の学びの質を高める指導タイプをもつ幼稚園教諭の実習反省会を観察し、その際の助言内容と指導のプロセスを検討している¹⁰⁾。これらから、保育者の実習指導に特有の知識・技術として、①「意識のズレ」を確認しながら指導上の課題を適切に判断し、設定していくこと、②実習生の経験や実現したいことを言語化すること、の2つが示唆されたとしている。また、中西（2017）は、学生39名が実習後に記入した「幼稚園教育実習振り返りシート」の中で、「実習指導者から受け取ったプラスのことは？」の質問に対して自由記述した回答から、実習生の成長を促進する指導の在り方について、①実習生は実習指導者との間に「保護されている関係」を得ることで、気持ちの安定が図られ、「嬉しい」「頑張ろう」という気持ちが育まれる。

保育実習における学びを高めるためには—保育実習ⅠA・Ⅱにおいて学びの成果が高かった実習生の語りから

②気持ちの安定が図られると共に、「学習者と指導者という立場の関係」を構築し、指導者に導かれ、観察から実践に至る実習の過程を深めることができる。③実習生は「保育者として認められている関係」を成立させることにより、自らの保育者としての意識を高め、進路に対する自信に繋げることが出来ると予想される、の3点を結論として示した¹¹⁾。これらの研究からは、実習中における保育者の学生への指導のあり方が、実習内容に影響を及ぼすことがわかる。

これらのように保育・教育実習における学びを充実させるための研究が行われてきている。ただ、保育・教育実習における学びの成果が高い実習生の取り組み方についての研究は見当たらない。そこで、本研究では、保育実習において、学びの成果が高い学生に着目した。このような学生は、保育実習において何を学びとっているのだろうか。また、保育実習で、いかにして学んでいるのだろうか。インタビュー調査を実施することで、保育実習における学びを高めるポイントが得られるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、保育実習ⅠAと保育実習Ⅱにおいて、学びの成果が高かった実習生の語りから、保育実習における学び内容と学び方を明らかにする。そして、保育実習における学びを高めるためのポイントについて示したい。

3. 研究方法

(1) 対象学生

対象学生は、A短期大学の長期履修コース^{註1)}に所属する女子学生1名である。本学生は、保育実習ⅠAと保育実習Ⅱにおいて、学びの成果が高かったと筆者が判断した実習生である。学びの成果が高いと判断したのは、実習園からの成績評価、訪問指導時における実習園の保育者からの評価が高かったこと、実習後における振り返りの成果物の内容、の3点からである。なお、保育実習ⅠAと保育実習Ⅱは、同じ園での実習であった。保育実習ⅠAでは1歳児クラス、保育実習Ⅱでは2歳児クラスでの実習であった。保育実習ⅠAは1年次、保育実習Ⅱは2年次に実施した。

(2) 実施日

1回目のインタビュー調査日は、2021年3月8日（月）であった。2回目のインタビュー調査日は、2021年11月15日（月）である。インタビュー調査実施日は、保育実習ⅠA（2021年2月22日（月）～3月5日（金））と保育実習Ⅱ（2021年10月25日（月）～11月5日（金））の終了後に実施した。

(3) 実施場所

実施場所は、A短期大学の教室において、プライバシーを確保した空間において行った。

(4) 質問項目

インタビュー調査における質問項目は以下の内容であった。①保育実習で学んだこと②保育実習の2週間の中で印象に残ったエピソード③困難な場面、戸惑った場面④保育実習2週間を振り返って、大学で学んだ知識、技術で役立ったこと⑤設定保育について⑥保育実習指導の授業において、学んでおいた方がよかったこと⑦今後どんな保育者になりたいのか⑧どんな保育がしたいか⑨保育に対する思いにつ

いて、である。質問項目は、1回目・2回目とも同内容であった。

(5) 実施方法

対象学生である保育実習生にインタビューを実施した。インタビュー調査では、許可をいただき IC レコーダーによる録音を行った。インタビュー時間は、一時間程度を目安とした。保育実習ⅠAと保育実習Ⅱの終了後に、1回ずつの、合計2回実施した。

(6) 分析方法

インタビューデータを逐語録としてすべて書き起こした。今回の研究では、質問項目①保育実習で学んだこと、に関する語りデータを分析対象とした。分析の際は学び内容について語られた箇所を下線部で示した。また、学び方について語られた箇所を二重下線部で示した。分析の観点は、その語りがどのような学び内容や学び方かである。

4. 倫理的配慮

研究への参加は任意である。また、参加に同意していただいた場合であっても、同意はいつでも撤回することができ、調査の途中であっても、いつでも中止することができる。この研究の趣旨に賛同し、同意していただき、別紙の同意書に署名のうえ、提出をしていただいた。

取得した個人情報、研究目的以外には使用しない。また、収集したデータは、厳重に保管、取り扱うものとする。

研究にあたり個人の尊厳および人権の尊重、個人情報の保護、その他倫理的配慮について、徹底する。

5. 結果と考察

保育実習ⅠAと保育実習Ⅱで学んだことの学生の語りから、学び内容と学び方についてみていく。

(1) 保育実習ⅠAで学んだことについて

保育実習では、(A)保育士の方の動きをすごい見れたなと思って、(B)保育士の方がどうやって子どもに援助しているのか考えたときに、1歳児でまだ結構、援助が必要な子どもが多くて、月齢差とかによって、一人であることが一人ひとり違うので、(C)それをすごく保育士の方は申していて、①子どもにあった援助、かかわり方をすごいされて、子どものことをすごい見ているなと思ったので、私ももっと観察力をこれから身に付けていきたい。②外とか階段とかちょっと危ないところを見たときに、本当に周りの子どものことをよく見て、こっちの子どもに対応してても、こっちの子どもが危険なことをしそうであったら、すぐそっちに行って声かけをして、あそんでるときに、子ども同士のトラブルや物の取り合いを遠くでやっても、誰が今、何を持っていて、それをパッと取ろうとしたら、今、何々ちゃんが持ってたでしょうみたいな感じで。そういうところまですごい見て、すごく視野が広がって思いました。

③保育士の連携。本当に子どもの安全を守るために、どんなにささいなことでも、部屋にいる保育士さん全員に聞こえるように、何々ちゃんのおむつ換えます、何々ちゃんも外出します。そういうのをちゃんとと言われて、それにしっかり応答していて、連携がすごい密にされていたので、そこも大切だなと思った。朝の場面では、保護者の方と話して、この子は、今日は朝から鼻血が出たみたいでと伝えて、保育士さんが代わるときに引き継ぎをどんどんされていて、保護者から伝えていただいたことは、全て違う保育士さんにも全部お伝えして（中略）

④保育士の方の時間のつなぎ目や合間での楽しませ方。例えば、10時から朝の会が始まるってなっても、1人のおむつを換えるとなったときに、少し時間が空いたときに絵本の読み聞かせをしたり手あそびを入れたりクイズをして待ってたり、本当にどんな少しの時間でも、子どもに対して楽しませようという工夫をすごくされて、レパートリーもすごく持ってらっしゃって、そういうのも今のうちから身に付けて、すぐにパッと出せるよ

うにしないといけないと学びました。(中略)
(自分ではできそうとかまだ難しいかなとかどんな感じ) ⑤すごく難しくなってる。本当に、勉強とか日頃からいろいろしてないといけないなって思いました。
(保育士の動きに達するためには何が必要) ⑥状況に応じてすぐ対応する力、少しの間でも子どもたちをすぐ楽しませるためには、どうしたらいいか頭の回転の速さ、そういうのも本当にその状況に応じてすぐされていたので、そこが本当に必要だなって。(対応力って、どうやったら身に付きそう) ⑦いろいろなシチュエーションを初めから想定して、もしこういうことが起こったときにはこういうことをしようとか。事前に自分で考えて、実際にシミュレーションをしておく必要があるかな。(中略)
(保育士の動き以外で、学んだなっていうのはありますか) ⑧子どもを最優先に考えて保育を行っている。環境構成であったり、今の子どもの状況を見て、おもちゃ、絵本もすごく用意されていたり。動線もしっかりと考えられていて、子どものことを考えてされているんだなって。そんなところまで考えるんやみたい。本当にいろんな場面で、すごく細かいところまで考えてされているんだなっていうのは思いました。(子ども最優先っていうのは具体的にどんな場面で) ⑨1歳児で、先に給食を食べるグループと、自由あそびをして待つグループとに分かれていたんですけど、自由あそびをしているグループに、おなかがすいたってずっと言ってる子どもがいて、この子もこっちの机で一緒に食べさせてあげてくれるみたいな感じで、子どものことを尊重しているのが感じられました。
(環境構成はどういう具体的ところで思ったの?) ⑩あそぶときに、棚と棚の間をしっかりと開けて、子どもたちがぶつからないようにして、絵本は隅で落ち着いて読めるようにして、そういうのがありましたね。2歳児やったら、このおもちゃであそんでいたけど、今の子どもたちにはまだ早いとか、時期もすごい考えていて。今の子どもにあったものを提供しているなと思った。(中略)
(他はどう) ⑪子どもたちの個人差、1歳児なので、生まれた月で全然違ったんですけど、4月生まれの子は、言葉もしゃべれるし、着替えも頑張れば一人でできるみたいな感じなんですけど、3月生まれの子はまだあまり言葉も出なくて、結構、保育士さんの援助が必要な子どもが多くて。1歳児だから月齢によつての違いがすごく見れて、こんなにも同じ年でやっても差がある。(中略) ⑫パズルであそんでるときに、これここやみたい。感じで言える子どももいれば、パズルの仕組みをあんまりわかってなくて。向きとかもすごいあるんですけど、そこもわからないような。これここ入れてみてって言っても、向きも全然、わからなくて、パツて出す子もいて。おままごとで、カレーライス作ってくれる?って言ったときに、本当にカレーライスのように、茶色と白色で分ける子どももいれば、そこら辺にあるものを全部、組み合わせで出してくれる子もいて、すごい差が出るんだなって思いました。(よく見れてますね。記録とかに書いてるの。) ⑬本当に気付いたときは書いてると思います。(他はどう) 他は、ちょっとだけメモを見てもいいですか。(はい、どうぞ) ⑭曲に合わせて体操をしているときに、本当に先生のまねをして踊っている子もいれば、キョトンとしている子がいたり、曲に合わせて、パーって違うところに走っていったり、全然違うことをしている子もいたりしました。

1) 学び内容について

下線部①からは、保育士が子どもにあった援助やかかわり方をして、子どものことをよく見ていることに学生が感心していることがわかる。また、学生自身が子どもを見る力を身に付ける必要性を認識している。子どもをよく見ることで、子どもにあった援助やかかわり方ができるのを学んでいる。

下線部②からは「すごく視野が広くなって思いました」と語られるように、保育士の視野の広さに気付いている。保育士は目の前でかかわっている子どもだけでなく、周囲の子どもにも視線を配っていることを学生は、捉えることができています。

下線部③からは、保育士同士の連携を学生なりに理解していることがわかる。どんなにささいなことであっても、連携することの必要性が学生に伝わっている。連携の場面を見ることによって、実習生は連携の方法や重要性を学ぶのである。

下線部④からは、時間のつなぎ目や合間の保育士のふるまいに注目していることがわかる。少しの合間であっても、子どもを楽しませる保育士の姿をよく見ている。「本当にどんな少しの時間でも、子ど

もに対して楽しませようという工夫をすごくされてて、レパトリーもすごく持ってらっしゃって、そういうのも今のうちから身に付けて、すぐにパッと出せるようにしないといけないと学びました」という語り部分からは、実習を通して、学生の課題が明確になっていることを示している。

下線部⑤からは、勉強をはじめ、日頃からいろいろと準備しておくことの大切さに気付いている。実習にむけて、事前に勉強することやいろいろと準備するように意識づけを行うことが必要である。この内容としては、前田（2020）⁵⁾ が、保育実習指導の授業のあり方を検討しており、実習先で求められる内容や子どもとのかかわりを意識させることが有効であるとの指摘が参考となる。

下線部⑥からは、状況に応じてすぐ対応する力が保育士に必要であると認識していることがわかる。これは、保育士の子どもをすぐに楽しませるための頭の回転の速さや、状況に応じた対応を見たからである。また、下線部⑦からは、状況に応じてすぐ対応する力を獲得するために必要なことが語られている。それは、すぐに対応できるようにいろいろなシチュエーションを想定しておくことである。シミュレーションをすることで、状況に応じた対応を実践しやすくなる。

下線部⑧からは保育者が子どもを最優先に考えて、保育していることに気付いたことを示している。下線部⑨のおながすいた子どもへの柔軟な対応や下線部⑩の子どものことを考えた環境構成についても、しっかりと見ることができている。このような場面を見て、子ども最優先に考える保育を学んでいる。下線部⑧で「本当にいろんな場面で、すごく細かいところまで考えてされているんだなっていうのは思いました」と語られているように、保育を非常に丁寧に見ている。

下線部⑪・⑫・⑬は、1歳児クラスでの実習ということもあり、一人ひとりの発達差が大きいことに気付いたことを示している。ことばの発達の違いやあそび方の違いがある。これは、1歳児を目の前にして、1歳児の発達の差をリアルに感じることで気付いたようである。また、1歳児とひとくくりに発達を見るのではなく、子ども一人ひとりの発達差を意識して、子どもを捉えることができている。

2) 学び方について

二重下線部（A）のように「すごい見れた」と語るように、とにかくまずは、保育士の動きをよく見ることである。このことから実習の学びを高めていく。

二重下線部（B）からは、保育士のかかわりをただ見るだけでなく、援助方法がどのように行われているのかを考えていることがわかる。保育士の援助方法がどのように行われているのかを考えることで、学びがより高まる。

二重下線部（C）のように、保育士の話をよく聴くことで、実習の学びがより高まる。保育士の話を聴き逃さない姿勢で実習に臨むことが重要である。

二重下線部（D）からは、学生が実習中にメモをとっていたことがわかった。日々、メモを取り、このメモをもとに実習記録を書いていたのであろう。実習中に少しでも気になったことはメモを取り、学びに活かすことが大切であると考えられる。

（2）保育実習Ⅱで学んだことについて

(E) 去年も多分言ったと思うんですけど、本当に保育士の方が子どものことを考えてやっているなっていうのもわかったし、(F) どういう意図があってそういう行動をしているのかも、今回は気を付けて見るように考えて

て、子どもに対する一つひとつの声かけもすごいしっかりと意図があって。
⑭今回の実習で、本当に難しいなと思ったのが、2歳児に対しての言葉かけなんですけど、2歳の子どもは、私が声かけしたことに対しては、実習生っていうのもあって、最初は聞いてくれないことも多くて。(G) 今日のエピソードにも書いたんですけど、⑭危ないことをしようとしたときに、私が危ないから降りてあそぼうねとか、そんな感じで言ったとしても、逆に面白がってもっと登ろうとして、それを (H) 保育士の方に相談したときに、2歳児は、危ないから何々してねって言ったとしても、なんで危ないのかがまだわかってないから、保育士の気持ちも交えて話すといいよって教えていただいて。保育士の方は、はしごを登ってたときだとしたら、もし何々ちゃんがそのはしごから落ちて痛い思いして泣いちゃったら、先生は悲しいからやめてほしいな、そういう保育士の気持ちも交えて話したら、子どもも、なんで危ないのか、先生が悲しい気持ちになるのもしっかりわかって、行動してくれるよと、声かけの意図、そういうことまでしっかりと考えて話すと、子どもには伝わることが多いよって教えていただいた。⑮2歳児というのもあるんですけど、結構、具体的に子どもがわかるように、しっかりと一つひとつ、声をかけることが大事だになってというのが、今回、わかった。
⑯子どもを見るときに、2歳だったら、6人を1人で見ないといけないときに、私は全然、慣れてなかったのもあるんですけど、本当にそれが難しくて、目の前の子どもにつきっきりになって、そのときの状況をしっかりと把握できてなくて、あれ、このとき、この子、何してたんやろみたいな感じでわからないことも多いんですけど(中略)自由あそびってなったら、目の前の子どもがあそんでいることに集中して、一緒にあそんだりしちゃうがちなんですけど、実習生でも、もしトラブルがあったときに、この子が先、持ってたよとか、そういう状況を把握できてないといけないので、全体的に目を向けることが本当に大事だになって。あそびのときだけでなく、活動のときも、ご飯を食べているときも、どういうときでも、全体をもっと意識した援助が、すごい大事だになって思った。
(他に勉強になったのありますか?) ⑰保育士の方々が、どうやって一緒に連携して保育を進めているかっていうのを (I) 見たときに、私のクラスは2グループに分かれてて、6人6人で、一人ひとりの保育士さんでまわしてたんですけど、保育士さんたちは、活動がばらばらになるときは、何分頃に帰ってきますとか、うまくまわるようにしっかりと細かいところまで声かけをしていることが多くて(中略)保護者の方から最初に、今日は、ちょっとおなか痛いって言ってとか、伝達があるときは、しっかりと保育士の方で共有されて、みんなで子どもの様子を注意して見ているなって思った。

1) 学び内容について

下線部⑭からは、実習生であり思うように2歳児がいうことをきいてくれないことを示している。このような場面での子どもとのかかわり方を保育士に相談している。保育士からのアドバイスを積極的に吸収しようとしている。保育士からのアドバイスを受けて、下線部⑮において「具体的に子どもがわかるように、しっかりと一つひとつ、声をかけることが大事だな」と語る。このように、2歳児に対して、具体的に声かけをすることの大事さに気付いている。

下線部⑯の内容は、前年度の保育実習ⅠＡ後のインタビューでも語られていた。目の前の子どもとのかかわりに加えて、保育室全体に視野を広げて子どもを見ることの重要性に気付いている。「あそびのときだけでなく、活動のときも、ご飯を食べているときも、どういうときでも」と語られているように、どのような場面でも、保育士が全体を把握していることを見ていたのである。学生は目の前の子どもとのかかわることで精一杯になっている様子がうかがえる。全体に視野を広げて、保育をすることを心がける必要がある。

下線部⑰の内容は、前年度の保育実習ⅠＡ後にも同様に語られている学び内容である。保育士同士の連携の大切さを再認識していることがわかる。前年度の実習において、保育士同士の連携の重要性に気づいているからこそ、今回の実習においてもこの点に注目できている。

2) 学び方について

二重下線部 (E) からは、前年度の実習でも語られているように保育士が子どものことを考えて保育していることを覚えていることがわかる。前年度の実習において、保育士が子どものことを考えて、保育していることが印象的な学びであったのである。

二重下線部 (F) からは「どういう意図があってそういう行動をしているのかも、今回は気を付けて見るように考えて」と語るように、保育士の行動の意図について注目している。昨年度よりも踏み込んで保育士の動きを見ようとしている。

二重下線部 (G) では「今日のエピソードにも書いた」と語るように、実習中におきたことをエピソードとして記述している。エピソードとして書きたいとして思い出される内容は、実習生の印象深いできごとである。その日のうちに、エピソードとして記述しておくことで、学び内容がより高まる。

二重下線部 (H) では、保育士に相談し、子どもとのかかわり方の実践的なアドバイスを受けている。このように、保育のうまくいかない場面での対応が、保育実習の学びに大きくかかわる。まずは、実習生が保育士に積極的に相談する姿勢が何よりも重要である。

二重下線部 (I) では、保育士同士の連携場面をしっかりと見ていることがわかる。保育士同士の連携を見ることで、保育士の連携方法を学ぶ。保育士をよく見ること、保育士の連携の大切さを理解している。

(3) 分析結果について

保育実習ⅠAと保育実習Ⅱの保育実習で学んだことの語り箇所を分析した結果をまとめて、つぎの表1・表2として示す。

表1. 学び内容に関する分析結果一覧

学び内容	語り該当箇所
子どもにあった援助やかかわりをするために子どもを見る力が必要であること。	保育実習ⅠA下線部①
視野を広くして、全体に目をむけることが大事。	保育実習ⅠA下線部②・保育実習Ⅱ下線部⑯
保育士の連携が大切であること。	保育実習ⅠA下線部③・保育実習Ⅱ下線部⑰
時間のつなぎ目や合間の少しの時間でも、子どもを楽しませられる工夫やレパートリーを持ち、すぐにバツと出せるようにしないといけないこと。	保育実習ⅠA下線部④
日頃から勉強やいろいろしておかないとできないということ。	保育実習ⅠA下線部⑤
状況に応じてすぐに対応する力が必要であること。	保育実習ⅠA下線部⑥
いろんなシチュエーションを想定して、実際にシュミレーションをしておく必要があること。	保育実習ⅠA下線部⑦
子どもを最優先に考えて保育を行うこと。	保育実習ⅠA下線部⑧・⑨・⑩
子どもたちの個人差。	保育実習ⅠA下線部⑪・⑫・⑬
2歳児へのことばかけの難しさから、具体的に子どもにわかるように一つひとつ声をかけることの大切さ。	保育実習Ⅱ下線部⑭・⑮

表2. 学び方に関する分析結果一覧

学び方	語り該当箇所
保育士の動きをよく見る。	保育実習ⅠA二重下線部 (A) ・保育実習Ⅱ二重下線部 (I)
保育士の援助方法がどのように行われているのかを考える。	保育実習ⅠA二重下線部 (B)
保育士の話をしっかりと聴き意識的に吸収する。	保育実習ⅠA二重下線部 (C)
実習中に気付いたことはメモを取る。	保育実習ⅠA二重下線部 (D)
保育実習ⅠAと保育実習Ⅱの学びの連続性を意識する。	保育実習Ⅱ二重下線部 (E) ・ (F)
保育士の子どもへのかかわりについて、どのような意図があっての行動かを気を付けて見る。	保育実習Ⅱ二重下線部 (F)
その日のうちにエピソードを書く。	保育実習Ⅱ二重下線部 (G)
うまくいかないことは、保育士に積極的に相談する。	保育実習Ⅱ二重下線部 (H)

6. まとめ

本研究では、保育実習ⅠAと保育実習Ⅱにおいて、学びの成果が高かった学生の語りから、どのような学び内容をどのように学んでいるのかをみてきた。学び方に関する分析結果8つを、6点にまとめた。そして、これらを保育実習における学びを高めるためのポイント6点として示す。保育・教育実習に参加する学生には、学びの成果が少しでも高まるように、以下の6点を意識して、実習に臨んでほしい。

(1) 保育士の動き・援助方法・子どもとのかかわりの意図まで考えてよく見る

これは、「保育士の動きをよく見る。」「保育士の援助方法がどのように行われているのかを考える。」「保育士の子どもへのかかわりについて、どのような意図があつての行動かを気を付けて見る。」の3つの学び方をまとめた。実習において子どもとかわる際に、実習生自身、子どもとどのようにかわればよいのか戸惑う。まずは保育士が、子どもとどのようにかわっているのかに注目してほしい。単にかかわり方を見るのではない。かかわり方における保育士の意図を考えるようにして、保育士の動きをよく見ることが心かげることが大切である。意図まで考えてよく見ることで、学びが高まる。

(2) 保育士の話をしっかりと聴き意識的に吸収する

学生のインタビューからは、保育士の話をしっかりと聴いていることがうかがえた。保育士の何気ないアドバイスや普段の保育に関する話を意識的に吸収していく姿勢が重要である。ここでは、保育士の子どもへのかかわり方や子どもを保育する際の視点を学ぶことができる。

(3) 実習中に気付いたことはメモをとる

学生は、これはという気付きがあつたときにはメモを取っている。このように実習中に何か気に留まつたことがあれば、メモをとった方がよい。このときのポイントは、その状況をメモすると同時に、なぜそれをメモしたのかを記録しておくことである。つまり何が気になったのかをあわせてメモをしておくといふ。その後、メモを振り返ったときに、なぜ、メモをしたのかがわかりやすいからである。

(4) 保育実習ⅠAと保育実習Ⅱの学びの連続性を意識する

保育実習ⅠAで獲得した学び内容を意識して、保育実習Ⅱで学び内容をより深めていくことである。このためには、保育実習ⅠAの学びをまとめておく。そして、保育実習Ⅱにおいて、発展的に学習できるようにする。保育実習ⅠAから保育実習Ⅱへの学びの連続性を意識することで、学び内容がより高まる。学生のインタビューでは、二重下線部(E)・(F)の語り箇所や全体を意識して保育をすることや保育士同士の連携の大切さについて、保育実習ⅠAと保育実習Ⅱの学びの連続性がうかがえた。

(5) その日のうちにエピソードを書く

実習を終えたその日のうちにエピソードを書くことで、学びをより高めることができる。鵜川(2019)⁷⁾や森(2016)⁸⁾が実習後の授業の在り方として、エピソード記述としてまとめることで学びが高まるという指摘をしていた。実習後の授業でも学びが高まるとの指摘であるが、できれば学生のようにその日のうちにエピソードとして記述する方がより望ましい。

(6) うまくいかないことは、保育士に積極的に相談する

うまくいかないことは、保育士に積極的に相談するということが重要である。実習生の中には、保育士になかなか相談しづらいという学生もいる。それは、このようなことを相談してもよいのだろうかや

保育士との関係性が十分でない場合に、自身で相談することに躊躇してしまう。また、保育士の忙しい様子を見て遠慮している場合もある。しかし、このような実習の取り組み方では、学びは高まらない。保育士に積極的に相談することで学びが高まる。

7. 今後の課題

最後に、今後の課題として、4点をあげておく。

1点目は、学生一人の語りデータのみからの分析であったという点である。学びの高い実習生の語りデータを、追加で分析する必要がある。

2点目は、実習における学びの低い学生の学び方について、調査できていない点である。

3点目は、実習園の保育士の指導方法についてまで、分析することができていない点である。実習園の保育士の指導方法による学びの違いについて明らかにしていきたい。

4点目は、実習形態の違いについて考慮できていない点である。大学によっては、保育実習ⅠAと保育実習Ⅱでの実習園が異なる場合もある。また、実習園によっては、担当するクラスが固定される場合やさまざまなクラスで実習を行う園もある。保育実習ⅠAと保育実習Ⅱにおいて、どのような実習形態が実習生の学びをより高めるのかを検討したい。

引用文献

- 1) 田村隆宏・木村直子・谷村宏子（2021）保育実践力向上に及ぼす保育実習の効果とその促進要因の検討—子どもとの関わりに関する保育実践力に注目して—、応用教育心理学研究、第38巻1号、63-75.
- 2) 三橋功一（2021）幼稚園教育実習における学びの成果（2）、日本教育工学会研究報告集、2021巻4号、144-151.
- 3) 川原亜津美（2016）保育実習Ⅰを通して得た学生の学びに関する考察—学生が実感できる学びとその過程—、研究紀要、66号、1-9.
- 4) 及川留美・野田敦史・岩崎淳子（2015）保育実習における学生の学び—正統的周辺参加による分析を通して—、未来の保育と教育—東京未来大学保育・教職センター紀要、第2号、1-9.
- 5) 前田有秀（2020）保育実習生の自己省察からみた実習指導のあり方についての一考察、尚綱総研論集、2号、73-81.
- 6) 山田秀江（2011）実習事後指導に関する一考察、四条畷学園短期大学紀要、第44巻、25-31.
- 7) 鶴川陽子（2019）保育実習における学生の学び：保育実習Ⅱのエピソード記述から、池坊文化研究、1号、35-39.
- 8) 森希理恵（2016）保育実習における学生の学び（1）保育実習Ⅱのエピソード記述より、保育研究、第44号、11-16.
- 9) 浅井拓久也・浅井かおり（2019）保育所実習における訪問指導のあり方の検討—実習生にとっての訪問指導の意義に着目して—未来の保育と教育、東京未来大学保育・教職センター紀要、第6号、1-10.
- 10) 小林美沙子（2020）幼稚園教育実習における実習指導の専門性—実習反省会での担当教諭による助言分析—、国際幼児教育研究、第27巻、141-158.

保育実習における学びを高めるためには－保育実習ⅠＡ・Ⅱにおいて学びの成果が高かった実習生の語りから

11) 中西和子 (2017) 幼稚園教育実習に関する一考察－実習生の成長を促進する指導の在り方に着目して－. 敬心・研究ジャーナル 1 巻 2 号、109-115.

註

註 1) A 短期大学には、長期履修コースがある。このコースは、通常 2 年間で学習するカリキュラムを 3 年間で学ぶ。

謝辞

研究にご協力いただきました A 短期大学の学生さんに感謝いたします。また、実習園の園長先生を始め保育士のみなさまに、大変お世話になりました。最後に、A 短期大学の教職員の方には、教育・研究活動を支えていただきました。ありがとうございました。